

I 調査研究報告

漢長安城桂宮 2号宮殿の調査

調査に至る経緯 当研究所では、中国社会科学院考古研究所との日中共同研究として、中国の都城遺跡の調査を進めている。1994年度には北魏洛陽城永寧寺西門の調査を行い（年報1995）、1996年度以降は対象を漢長安城とした。漢長安城は陝西省西安市西北方の農村地帯に位置し、1956年以来、考古研究所が継続的な調査を行っており、桂宮では1号から5号までの宮殿建築遺構を確認している。今回はその中で遺構の保存が比較的良好で、調査に際して障害の少ない2号宮殿を対象とした。

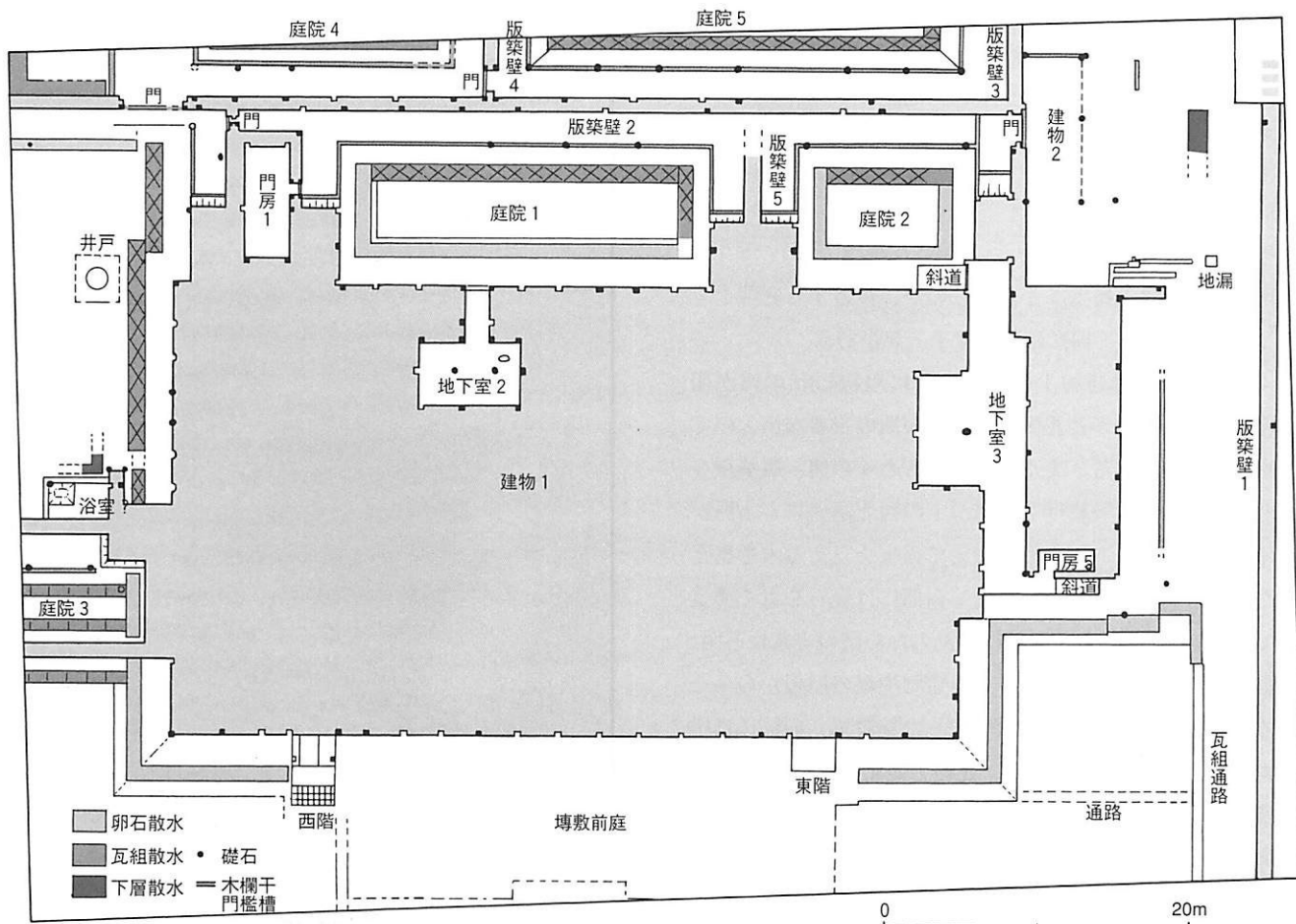
桂宮は武帝（在位BC.141～87）が后妃の為に造営した宮殿で、前漢末には皇后の隠居の地として使用された。桂宮に関する文献上の知見は、正殿は鴻寧殿であることなど断片的なものであるため、その構造の把握には、実際の発掘調査に大きな期待が寄せられた。調査は1997年11～12月に第1次調査、1998年2～5月に第2次調査を行い、第1次調査には小澤毅と箱崎和久、第2次調査には玉田芳英と次山淳が参加した。なお、玉田、次山は3月26日、遺構の全容を確認した時点で現地を離れ、その後の断割調査には参加していない。そのため、ここで報告する内容は、3月26日時点での知見であり、最終的な成果は『考古』1999年第1期に報告予定である。また、本年度は漢長安城周辺の航空写真に基づく正確な地形測量を行い、既往の測量成果を修正して新たな配置図を作成した。



漢長安城西半部配置図

発掘調査の概要 遺跡は現状では果樹園となっており、北約90mには1号宮殿が高いマウンドとなって残っている。調査区はボーリング調査と試掘調査の結果により、東西84m、南北56mに設定した。基本的な層序は上から耕土、包含層で、現地表下約1mで漢代の遺構面に達する。以下、主要な遺構について説明する。

建物1 2号宮殿の正殿で、版築による基壇（台基）が残存する。基壇の規模は、東西幅は51m、南北幅は29mあり、現状で漢代の旧地表面から30cmほどの高さが残る。火災にあった痕跡が顕著で、壁面などは紅く焼けている。周囲の壁にはおよそ2～3m間隔で方形の壁柱穴が並び、礎石が残るものもある。基壇上の支柱の礎石は、削平の為に残存していない。南面の東西2ヶ所に踏歩（東階・西階）と、北面の5ヶ所、西面の1ヶ所に基壇に上るための埠敷の斜道がある。



桂宮2号宮殿発掘遺構略測図 1:500

基壇内には大小4基の地下室がある。地下室3は東端近くにある南北室で、中央部は東西幅7.2mと広く、南部と北部はやや幅が狭い通路状となる。床面は埴敷で旧地表面より低く、南北両端に埴敷の斜道を設けて出入りをする。壁柱穴をともない、中央部に1個の礎石を残す。地下室2は北端やや西にある東西室で、埴敷の床は旧地表面と同一レベルにあり、北側に入出りの通路がある。主柱の礎石2個と壁柱穴が残る。門房5は地下室3の南端東にある東西方向の小室。床は埴敷で、東南隅に土器を据え付けている。壁柱穴はない。門房1は台基北面西端にある南北室。床はやはり埴敷で、旧地表面と同一レベルにあり、東に出入口を設ける。門房は地下室や宮殿に入出りする人を監視する門番がいた部屋と考えられる。これらの地下室の側壁は、日干煉瓦を積み上げた上に麦藁や麦殻を混ぜた泥を塗り、さらに漆喰を塗って仕上げる。こうした手法は基本的に建物1の壁も同様である。

基壇の南面と西面には、建物の軒から落ちる雨水を弾く散水がある。北面は後述する庭園の散水が建物の北面散水を兼ねるが、東面については散水は検出していない。南面と北面、西面の南半部の散水は拳大の玉石を密に詰めて並べた卵石散水であるが、西面北半の散水は埴と瓦を組み合わせて敷いたものである。南面の卵石散水の外方約1mには埴を縦にして並べた線埴があり、散水の周囲は埴敷であったことが知られる。

東階 東西3.1m、南北2.1mの範囲に線埴を並べる。2時期の変遷をたどる可能性があり、前期のものは線埴内に空心埴を置いて階段を作り、登壇の施設とする。第一次調査では空心埴が出土しており、これに関連する遺物であろう。東階の東端に揃う形で、南約2.2mに南北の線埴があり、南に埴敷の通路があるものと想定される。

西階 線埴で東西3.0m、南北4.4mの区画を作り、その内部を東西の線埴でさらに2区画に分ける。南の区画の南半には文様埴を東西8列、南北3列並べており、その北側にも文様埴が残る。北の区画は南北2.2mであり、内部を線埴でさらに東西に3区画に分ける。東階と同様に2時期ある可能性があり、前期には北区画内に空心埴を置いていたとみられる。東端には礎石が1個残り、西には礎石抜き取り穴がある。西階の東端に揃う形で線埴を2列南北に並べてあり、東階と同じく南に埴敷の通路があるとみられる。東階と西階の間には散水がなく、ここは逆凹形の埴敷前庭となる。埴は一部に残存するのみであるが、埴を敷く際に下に置いた灰色の粘土が全面に残る。前庭部の周囲は線埴で区画する。

版築壁 宮殿の周囲や建物を限るために版築土を積み上げた壁。壁柱穴をともない、壁面には壁の下塗りのために瓦を貼りつけている個所もみられる。版築壁1が東端の塀と考えられ、台基北方の版築壁2が、建物1とさらに北方に存在が予想される施設とを区画する。建物1の

東北隅からは版築壁3が北方にのび、後述する庭院1・2間と庭院4・5間には版築壁4・5がある。

版築壁2には建物1の西端北方に幅約4.8mの門が開き、ここが建物1と北側の施設との間の主要な出入口であると考えられる。また、版築壁2と4の間、版築壁3と建物1の間、版築壁2と門房1の西北隅間にも小門が開く。門は壁の一方の面に揃えて扉板を支える木を据えた門檻槽があり、開口部の壁端両面には礎石を置く構造である。版築壁5と2の間は攪乱のため門の有無は不明。

庭院 四方から張り出してくる建物や壁の屋根から落ちる雨水を弾く散水を長方形に配した施設で、内部には屋根がなく、吹き抜けとなる。建物1の北面に庭院1・2、建物1の西面に庭院3、版築壁2の北方に庭院4・5がある。庭院1の南・西の散水と庭院2の東・南・西の散水、および庭院3の東の散水は卵石散水であるが、その他は瓦組散水となる。散水と版築壁間には木の板を立て並べて壁とした木欄干があり、築地回廊風に架かる版築壁の屋根を承ける。版築壁と木欄干の間は廊道で、壁をはさんで複廊状となる。庭院内外の地表面は、廊道を含めてすべて埴敷である。

建物2 調査区東北隅、版築壁3の東にある廊状構造物。南北2間、東西1間分の礎石を確認し、西側の礎石は版築壁3の壁柱が兼ねる。北には東西の木欄干がある。

井戸 建物1にともなう西の瓦組散水の西方にある。直径1.4mの円形の掘形で、深さは5m、底に径約70cmの瓦製の井戸枠（井圈）が4段残存する。その上は弧状の埴を積み上げて壁を作っていたとみられる。井戸の南方80cmには、線埴がわずかに残り、周囲に埴を敷いた井亭（井戸館）があったと考えられる。井戸の内部からは、彩絵陶や鉄器をはじめ、多くの遺物が出土した。

地漏 建物1の東北方にある排水用の井戸。方形で、一辺約60cm、深さは約1m。長方埴を組み合わせて作る。

その他、庭院3の北には版築壁と日干煉瓦の壁で囲われた一画がある。西北隅部には一辺約2mの埴敷の窪みがあり、日干煉瓦壁の交点に礎石が1個残る。性格は不明であるが、その構造と建物との位置関係から、大明宮麟徳殿に備わる浴室のような性格の施設の可能性がある。

なお、この一画の北側と調査区東北隅、版築壁1の西方に、整地土に覆われた下層散水を一部検出している。この散水に対応する建造物は現状では不明。調査区全面



排水用の地漏（北東から）

にはかなり厚い整地土があることを確認しており、今後の調査の進展で性格が明らかになることが期待される。

調査の成果と今後の展望 今年度の調査により、桂宮2号宮殿の正殿全面を検出し、その規模と構造が明らかになるとともに、一部の付属施設も検出した。この成果をこれまでの漢長安城の調査成果と合わせると、未央宮しょうぼう椒房殿とその規模、構造が類似していることが判明した（中国社会科学院考古研究所1996『漢長安城未央宮』）。両者は基壇の規模をはじめ、内部に地下室、北部に庭院を持ち、北方に付属施設があること、南面に東階、西階があることなど、共通点が多い。

椒房殿は『漢書』の記載から、皇后宮の正殿であることが判明している。桂宮は未央宮より80年ほど遅れた武帝期に建設された后妃の宮殿であることから、2号宮殿が椒房殿をモデルにして建築された可能性は当然考えられる。今回発掘した建物1は、このような点から桂宮の正殿である鴻寧殿である可能性が、中国側の調査主任から指摘された（4月22日付『光明日報』）。今後は正殿の北方を調査する予定であり、その構造の解明がさらに進むことが期待される。

今回の調査は桂宮に対する第1回目の調査であることもあって、中国式の調査方法で行ったが、日本の方式とはやや異なる点もみうけられた。今後は、日本式の方法を一部採用することによって、両国の発掘調査技術の交流をさらに緊密化し、より一層の成果をあげていきたい。

（玉田芳英・次山 淳／平城調査部）